

く、しみじみとしたものを内に宿しつつ着々と形造られて行くでしょう。いや、行かねばならぬのです。そして、それを形造るもの、それは、小さく、だれの目にもとまらなくとも、内に輝きを放って、聖く真剣に生き抜く人間の魂のいのちなのであります。

人間は複雑なもの、そして人間の世界も、また複雑ななぞを含んでいるようですね。では、皆様また、来週この時間に。

第十四話 三百五十円のいのち

皆様、今まで両三度にわたってお話し申し上げてきたこと——人間の内面的な美しさ、芸術というもの、あるいはドライとウェットな生き方などについてお話し申し上げてきたことから、私は皆様がおのずから一つの結論をお引き出しになったのではないかと思います。あるいは結論とまでは行かなくとも、私が何を話そうと意図しているかということをおぼろげにでもお気づきになったのではないかと思います。それは、人間とはきわめて複雑なもの——やがて土に帰って行くこの動物的な肉体^{からだ}だけで、すなわち物質だけでできていると簡単に割り切ってしまう何ものかである——という一つの事実なのであります。

今世紀の初頭から、すばらしい勢いで発展して参りました科学の成功に目がくらんで、私たち近代人は、ともするとすべてを科学的に割り切り切りたい、つまりすべてを目で見、手で触れ得る世界に返したいと思うようになり、また目で見たり手で触れたりできる世界、つまり科学で立証された世界だけが、唯一の实在なのであり、それ以外の世界、科学の対象となり得ない世界は、非

実在つまり一種のまやかしの世界だと思ふ、そういう唯物論的な世界観を持つようになりまして。この問題についてはまたいつか時間を改めて、ゆっくり考えてみたいと思いますが、きょうはただ、私たち人間という存在だけに問題をしばって、こういう唯物論的な考え方を少し、解剖してみることにはいたしましょう。

仮に、人間を科学的、唯物論的に割り切ったらどうなるでしょうか？ それはむづかしいことではありません。フォイエルバッハというドイツの唯物論者が、はっきり言っています、人間とはおのが食するところのものであるということになります。すなわち私たちの食べる食物が消化吸収されて血となり肉となり、全身の細胞を形造って行くのですから、私たちは、つまり私たちが食べるものででき上がっていることになりました。ある学者は、私たちの肉体は頭のてっぺんから足のつま先まで、すべての細胞がすなわち、私たちの全身全存在が、二週間ないしは一カ月で完全に新陳代謝によって、入れかわると言っています。ですから私というものを、ただ肉体の面からだけ眺めるならここ一カ月から二週間位までに私が食べた食物の内容物ででき上がっているということになります。人間というものが、ただそれだけのもので、それ以外のなにものでもないということになると、私の考えたことや、私が今お話し申し上げている、こういう言葉や思想はすべて私の食べた食物の変形に過ぎぬということになります。また、ほんとうに唯物論者は

まじめにそう考えて、人間の思想や発明や科学する力などを、脳細胞の分泌物だと断言するのであります。そうなる問題は簡単ですね。人間の値打ちは人間の肉体を分析してみれば、はっきりわかります。ある科学者の調べたところによりますと、人間の肉体は、まず、晒布一枚を洗うに足る水分、一杯の茶わんのコーヒーを甘くするだけの糖分、数箇の馬のひずめを打つに足る鉄分、三本の鉛筆の芯となるだけの黒鉛などがあって、それらを総計すると、丸公で九五セントになったという、つまり一ドルにならないところがみえますが、日本円に換算しますと、およそ三百五十円ということになります。それが人間ひとりの値打ちとなると、どうも私たちはあまり上等な存在ではないと言わねばなりません。けれど、どんなに安く見積もられても、人間の肉体を分析すると、それだけしかないので仕方がありますね。これが唯物論者の結論なのです。

ところで私たちは人間というものの複雑さを一緒に少しは眺めて来たつもりです。人間は複雑なもの、動物のように欲情するかと思うと、人間独特の内面的な美しさに引かれたり、激しい憎しみに燃えていがみあうかと思うと、素晴らしい芸術的作品を残したり、肉体は富み榮えて絹に包まれ美食に飽いていながら、心の奥底ではいやしがたい不満に悩まうめくのです。この複雑さはいったい、どこから来るのでしょうか？ それは人間をただの動物として、肉体という物質だけで割り切っては永久に解決のできないものであります。それを解く鍵はただ一つ、人間の

その複雑さの源である一番奥底の人間の本質に目を向ける以外にありません。さて、それでは人間の本質……人間とはいったい、なにものなのでしょう？ 正しい哲学ははっきりと人間を定義して、「人間は理性的動物である」と申しています。人間は確かに動物の一種に違いありません。が、人間を他のすべての動物から区別するところは、人間には理性があるということなのです。そこで人間の動物的生命の主体、すなわち主人公は、この物質的肉体であることは明らかなことですが、では理性的活動の主人公はいったいなにものなのでしょう？ 人間の理性的活動と呼ばれるものに、知恵と意志という二つのものがあることは、皆様ご承知の通りであります。

あの終戦直後の乗物の殺人的混雑と、それに伴う道義の頹廢には真に目をおおわしめるものがありました。時として美しい情景に出合うこともありました。ひとりの、一見なんの教養もない職工が、見知らぬ老婆を助けて席を譲るのです。老婆は一応は辞退した後で、さすがにうれしそうにいいねに感謝して腰をおろし、それから、まるで自分の息子をいたわるかのように、その職工にはおえみかけながら、その荷物を受け取って自分のひざに抱きとってやります。なんでもない、きわめて当然なことではありますが、周囲のすさんだ状況の中にあつて思わず、ハッとさせられるような心打つゆかしさに、私はちょうど見失った宝を見つけたときのように、心は

ずんでフトひとり言を言うのでした。「ああ、これだ。この礼儀と愛情！ 敗戦の現代日本に欠けていたのはこれだったのだ！」と。

ひとりの職工とひとりの老婆と、そして席を譲る一つの行為……私の目から入って来た姿は、それだけです。けれども、次の瞬間、私の知恵はその職工と老婆の姿を遠く乗り越えて、現代の敗戦日本に欠乏する「礼儀」と「愛情」のとうとさを見たのです。それが、人間の知恵の働きののです。

ある学生は、学生の分際でいつも学校からの帰り道、映画館に入ったり、カフェーに立ち寄ったり、ときにはダンスホールに入り浸ったり、というのでついに校長の面前に呼び出され、学生の自分を忘れ、その義務を怠って、学校の名譽を傷つけたとかで、退学処分が付されました。というこの数行の文章の中に出て来る数箇の単語、たとえば学生の分際、本分、義務、名譽などという、言葉はありますが、しかし、そういうものがどこかに、形と色とをもって実在するのでしょうか？ いいえ、それは形も色もない目にも見えず手にも触れ得ない、非物質的な私たちの「思想」あるいは「考え」つまり私たちの知恵の産物なのであり、物質や感覚の世界を遠く乗り越えた彼岸の世界の問題なのです。そして、私たち人間の知恵は他の動物たちのあずかり知らぬこの彼岸の世界に生き、働き、そこで成長発展して行くものなのです。こうして

ニュートンは一つのりんごが木から落ちるのを見て、万有引力の法則を発見しました。ルベリエは天王星の軌道の細かな計算から、必ず、一つの星がなければならぬことに気づき、海王星の存在を洞察しました。哲学者アリストテレスは、目に見える結果としての天地万物から、その原因を追求し、ついに目に見えぬ第一原因としての神の存在を推論しました。これらは動物的な、肉体という物質とはなんの関係もない人間のも一つの姿……知恵という精神活動の主体としての、人間精神の实在を雄弁に物語り、みごとに証明しているのです。

更に、人間には自由意志という理性の力があります。さきほども申しましたように、人間は動物の一種なので、動物としての本能を持っています。すなわち食欲や、性欲や、生存欲や、支配欲などの本能でありまして、この本能の力の強さを知らぬものはないでしょう。この本能、この欲望があるからこそ、動物は生きるのであります。ところが、人間の持つ自由意志はこの最高の動物的生命力と言え、本能の上に君臨して、本能をもおのが意志に屈服せしめようとして、国に殉じたことでしょうか。友は、その友情の道義を裏切りたくないばかりに、おのが恋愛をも犠牲にすることに誇りを感じるのです。かつての戦争中の欠乏の中で、母は子供たちの喜ぶ顔を見るためには、自分の最少限の食物をも与え尽くして悔いなかったのでした。と言っても、そ

ういう英雄的な行いが、なんの抵抗も感じないでやすやすとできるはずがありません。そこには、あくまでおのが権利を主張する本能の強烈な抵抗があり、その本能に逆らって道義に生きるためには、激しい血の滲むような戦いがあります。人間は複雑なものであるという、その複雑さの一つは、この一個の人間の内部における本能と理性との戦いにあると言えましょう。しかし、その戦いについて理性が勝利を得たのです。人間の持つ動物性が、その上に位する、一つの力によって屈服せしめられたのです。屈服せしめられたのが人間の動物としての肉体であるならば、それを屈服せしめたのが同じ肉体であるわけがないという、この事実こそ、人間の肉体以外の一つの主体、すなわち人間精神の实在を見事に立証していると言わねばなりません。

物質を乗り越えて、無形の真理の中に突き進んで行く人間の理知……動物的本能に打ち勝ってその上に君臨する自由意志……このすばらしい精神活動の主人公は、土から造られてやがて土に帰って行く人間の動物性とはなんの関係もない、独立した一個の实在、すなわち私たちが精神、あるいは心、あるいは靈魂と呼ぶところの目には見えませんが、あくまで現実的な實在なのであります。

人間の持つ理解しがたい複雑さは、人間というものが一個の存在でありながら、やがて土に帰ってゆく物質としての肉体と、感覚を超越した靈魂という全く相異なった二つのものからでき上

がっているという、この事実を考えると、その不思議ななぞは釈然として氷解するのです。

皆様、ソッと胸に手をおいてみましょう。生きていますね。心臓は鼓動し肺は息づいています。それは、あなたの肉体のいのちです。けれど残念なことに、いつかはその心臓の鼓動もやみ、肺の呼吸は止まり、目も見えず、耳も聞こえなくなりましょう。肉体のいのちは、やがて終わるのです。

けれど、更に心の耳をすませて、あなたの一番奥底の声に耳傾けて見てください。時間と空間とを超越し、無限なるものに向かってあえぎ続ける、あなたの魂の息吹きにお気づきにはなりませんか？

深淵のような、限りのない価値をもつ、あなたの魂の實在にジッと目をとめて、ああ、生きて来てよかったと、お思いにはなりませんか？

科学万能の現代です。けれど、それに眩惑されて私たちのほんとうの姿を見失ってはいけないと思うのです。

では、また来週、皆様ごきげんよう。

第十五話 思い出話

皆様、ここしばらく少し理屈っぽいお話が続きましたので、きょうは中休みの意味で、ちょっとした思い出話を申し上げてみたいと思います。どうぞ、楽な気持ちで聞いてくださいませ。

そうですね。もう二十年近くも昔のことになりました。どうか、私は長上の命令によって関西の神戸の教会に勤めることになりました。実は、私は神戸の生まれなので私にとってはすべてがなつかしいこきょうなものでした。神戸に赴任して間もなく、私は教会の伝道婦から、Kという家のお嬢さんが、もう何カ月も胸をわずらって寝ているのですが、私が神戸に来たことを知って、とても会いたがっているという話を聞きました。Kの家の長男というのが、私と小学校の同級生で四十年前のカトリック信者といえは、同じ小学校の生徒の中では、ほんとうに数えるばかりしかありませんでしたので、Kは私にとっては信仰を同じうする貴重な友人でありましたが、この友人も胸を病んで、ある夏、須磨の海岸で若い生命を終わらせたのでした。今、同じ病気に伏せている少女というのは、その妹なのです。Kの妹ともなれば、何をおいても見舞ってやりたい信者の